西暦 2022 年 8 月 2 日

2022 年度聖路加国際大学大学院 看護学研究科
課題研究

急性期脳卒中患者を看護する
ジェネラリストナースの倫理的ジレンマ

～倫理的環境を醸成するための

ニューロサイエンス看護上級実践看護師の役割～

Ethical Dilemmas of Generalist Nurses Caring for

Acute Stroke Patients :

The Role of the Neuroscience Nursing Advanced

Practice Nurse in Fostering an Ethical Environment

学籍番号　20MN020

氏名　髙栁　知美

要旨

【目的】

急性期脳卒中患者を看護するジェネラリストナース（以下、ナース）が倫理的ジレンマを抱いた際に感じたこと、その対応方法、希望する支援内容をインタビュー調査から明らかにし、倫理的環境を醸成するためのニューロサイエンス看護上級実践看護師の役割を考察した。

【方法】

研究デザインは質的記述的研究であり、急性期脳卒中患者を看護するナースを対象に半構造化インタビューを実施、データのカテゴリー化を行った。対象者は、Patricia Benner の Dreyfus Model の第 1～5 段階のナース 5 名以上とした。本研究は所属施設の研究倫理審査委員会にて承認を得た(NO.22-A002)。

【結果】

研究対象者は、第 1 段階～第 5 段階のナース各 1 名ずつ計 5 名であった。急性期脳卒中患者を看護するナースが倫理的ジレンマを抱いた際に感じたことは、【倫理的ジレンマを感じることが出来た安堵感】【不本意な看護ケアを提供したときの悲感】【患者の意思が確認できないことによる提供した看護ケアへの不全感の出現】などの 5 カテゴリーであった。倫理的ジレンマを抱いた際の対応方法は、【自分の気持ちを解消するために同期と話す】【先輩から教示を受ける】【病棟内の設定された場で皆で考え合う】などの 5 カテゴリーであった。さらに希望する支援内容は、【倫理的ジレンマの対応力の向上】【倫理に関する専門家とのディスカッションの必要性】【病棟間の垣根を越えて倫理的ジレンマを語れる場の確保】などの 6 カテゴリーであった。

【結論】

【不本意な看護ケアを提供した時の悲感】【患者の意思が確認できないことによる提供した看護ケアへの不全感の出現】の 2 カテゴリーは、患者の意思を確認できないことが影響し導き出されたカテゴリーであり、脳卒中などの急性・慢性問わず意識障害をもつ患者を対象とするナースが倫理的ジレンマの際に抱きやすい感情と推測できた。【病棟内における倫理的ジレンマを捉え直す場の必要性】【病棟の垣根を越えて倫理的ジレンマを語れる場の確保】【倫理に関する専門家とのディスカッションの必要性】などから病棟内外で倫理的ジレンマを共有できる場と機会、倫理に関する専門家とのディスカッションできる環境づくりが重要と考えられた。倫理的ジレンマを共有できる病棟内外の場と機会、倫理に関する専門家とのディスカッションできる倫理的環境の醸成が、ニューロサイエンス看護上級実践看護師の役割として重要であり、それを可能にすることで意識障害をもつ患者の看護の質向上、患者の QOL 向上に繋げることが出来ると考えられた。